

## 令和3年度 幼稚園教諭免許認定講習等推進事業 実施状況（令和3年度1月7日時点）

※その他、実施状況についてアンケート集計結果などまとめた資料がある場合は参考資料として提出すること。

受託団体	岐阜女子大学	指導大学	岐阜女子大学
開設講座数等	10	各講座の受講定員	30名
受講料	6,000円		
講習実施予定時期	6月～12月		
主な特徴等	実務経験年数8年以上を経過の中堅層教員を対象とし開講。講習形態は、対面授業を基本とし、一部 e-learning を組み合わせた hybrid 型講習とし、土日に開講。		
募集状況、受講者数等			

○令和3年度の講座開講状況（受講者数等）は、以下の表の通り。

表1. 令和3年度講座開講状況

	講座名	日程	申込 人数 (人)	受講 者数 (人)	勤務 先等 (人)	年齢 構成 (人)
1	幼児理解	6/26(土)・27(日)	0	0		
2	教師論	7/3(土)・22(木・祝)・31(土)	8	8 (岐5・沖2)	公3・私5 幼6・こ2	30代3 40代4 50代1
3	保育内容（言葉）	7/10(土)・17(土)・8/7(土)	11	11 (岐9・沖2)	公3・私8 幼8・こ3	30代3 40代5 50代3
4	教育の方法・技術	7/11(日)・18(日)・9/11(土)	10	10 (岐6・沖4)	公4・私6 幼6・こ4	30代3 40代5 50代2
5	教育経営学	9/4(土)・18(土)・10/9(土)	7	7 (岐4・沖3)	公4・私3 幼4・こ3	30代1 40代4 50代2
6	保育内容（表現）	9/19(日)・26(日)・10/10(日)	7	6 (岐3・沖3)	公3・私3 幼3・こ3	30代1 40代4 50代1
7	教育原理	10/16(土)・24(日)・11/20(土)	2	1 (岐1・沖0)	公1・私0 幼0・こ1	40代1
8	幼児と言葉	10/17(日)・24(日)・11/21(日)	13	12 (岐9・沖3)	公4・私8 幼8・こ4	30代3 40代6 50代3
9	遊びと文化Ⅱ	11/27(土)・12/4(土)・18(土)	1	0		
10	教育課程論	11/28(日)・12/5(日)・19(日)	6	5 (岐2・沖3)	公3・私2 幼2・こ3	40代4 50代1

※勤務先等 公＝公立，私＝私立 幼＝幼稚園，こ＝認定こども園を表し，横の数値は，人数を表す

※受講者数 岐＝岐阜，沖＝沖縄の会場を表す

※年齢 年代の数値は，人数を表す

## 想定と実績との比較

※定員に対して申込者数、受講者数はどうだったかなどを記入してください。

- ・各講座定員30名を設定していたが，最大受講者数は13名であり，開講予定の10講座平均受講者数は6名であった。
- ・岐阜の会場と沖縄の会場の2か所を設定したが，沖縄の会場での受講が岐阜に比べて少ない状態であった。
- ・実施前の想定においても，沖縄会場の定員数を岐阜の定員数より少なくしていたため，想定通りの受講状況であった。

○受講者募集に当たっての工夫、うまくいったこと、課題

<広報・周知の観点> ※ ・=工夫 ○=うまくいったこと △課題

・募集要項を、岐阜県、愛知県・沖縄県の公・私立幼稚園・認定こども園・保育所、加えて、県・市町村教育委員会に郵送

・大学ホームページによる広報

△上記広報を行ったが、想定の定員には各講座、到達していない

△募集要項を郵送した園において、本講座の認知を確認したところ、園長が認知していないと判明したためm  
次年度は、会場近隣の園には、直接説明をし、受講を促すことが受講者数を増やす方策の一つと考える

<事業設計の観点>

・講座の開講日程を、土・日曜日に設定

・対面の授業を基本に、科目の中で一部を e-learning の形態で受講をする hybrid 型講習とした

・経験年数 12 年経過の教諭において、1 年で幼稚園免許状 2 種から 1 種への上進ができるようにした。

<幼稚園団体、自治体、大学、園等との連携の観点>

・岐阜県と沖縄県の両県、並びに市町村の教育委員会の担当者を本事業の評価検討委員に委嘱し、講習の内容、周知の方法、受講人数を増やしていく方策などを評価検討した

・岐阜県内にある他大学と情報共有をし、講座開講のすみ分けをして実施した

・姉妹校の沖縄女子短期大学でも開講を実施。

<課題>

・ハイブリット型講座のデザインと教えないで学べる学修環境の整備

・キャリアステージに対応した幼稚園教諭に求められる資質能力の構造化

・幼児教育の新たなキャリアである幼児教育コーディネータ の養成カリキュラムの開発

○運営・手続きに関しての工夫、うまくいったこと、課題、国への要望

<運営・手続きに関しての工夫>

・科目の一部に取り入れた e-learning の形態においては、動画とテキストを用意し、受講生の学びを高める工夫を行った。加えて、質疑応答ができる体制を整え、受講生からの質問に対応した

・対面と e-learning での授業内容をさらに発展的に学んでいくことができるよう、受講生の実践に還元していくような問題解決型の講座を行った

<うまくいったこと>

・ e-learning の形態を一部取り入れたことにより、受講生からは、「自分の生活スタイルに合わせて学ぶことができ、すごくよかった。」、「学びやすかった」との声があった

<課題>

・ e-learning の形態は科目の一部に取り入れていたこと、授業担当者にとっても新たな取り組みであり熟慮を要したことなどから、科目により、科目開講日程のどのタイミングで活用するかが、科目開講日まで、決定することもできない科目もあった。そのため、受講生からは「事前に対面、e-Learning の終了時間を知らせていただけたら、よりわかりやすかった。」との意見があった。

<国への要望>

・ 1 種免許への上進に教員のインセンティブがない。努力義務から何年までに上進しなければならないというような義務に変更し、専修免許への上進を努力義務に変更などインセンティブを働かせることができる方策を  
お願いできないか。

## ○講座内容についての受講者、現場からの反応（受講生アンケート等の意見まとめ）

### <ためになった、現場で役に立っている等の声>

・対面と e-learning での授業内容をさらに発展的に学んでいくことができるよう、受講生の実践に還元していくような課題を提示、取り組むことを行ったことにより、次のように受講生からの声をもらったり、受講生の様子を見てとったりすることができた。

→・「自身もそうだが、新任教諭の学びにもつながりました。」との声があった

（※実際の学修課題として、科目内で保育活動の振り返り方法の理論を学び、その後、実際に振り返りをご自身の勤務園にて実践。本受講生は、保育活動を新任教諭が実践し、受講生が参観。その後、園内での振り返りを行っている。）

・紙しばいを制作する課題を提示したところ、制作のみにとどまらず、実際に園児に読み聞かせを行っており、保育実践活動への活用へ深化することができた様子を見てとることができた。

・各科目において受講生同士が話をする場面を多く取り入れるように心掛けた。受講対象者は、実務経験が豊富な先生方である。そのため、テーマを提示し、ディスカッションをする中で、ご自身の保育・教育観や日々の実践の見直しを行うことができていた様子を見てとることができた。

### <改善に向けた提案>

・授業の設計に関して「何をどのように教えるか」がカリキュラムである。それに対して、カリキュラムを構築するための方法論が「インストラクショナルデザイン」である。

・今後、広く深く学びを継続し、学び続ける教師として、「インストラクショナルデザイン」に基づいて自律的な学びを設計し、それを「ハイブリット型授業」として位置づける。この学びは、発展性がある学習方法になると考えている。

本学としては、インストラクショナルデザインや e-Learning の学び次のように考えている。

・インストラクショナルデザインは、カリキュラムを効率的に教えるために、学習者の特徴や与えられた環境、リソースなどを考慮し、最も効果的で魅力的な教育方法を選択することであり、実行と評価を繰り返すことで、研修の成果を高めることができる。

・e-Learning のみでの学修は、いつでも、どこからでも学修ができるため、教えないで学べる完成型として位置付ける。すでに社会には多くのオンラインでの学修機会があり、学び方として定着しつつある。

## ○特に工夫した講座内容、次年度以降工夫・検討したい講座内容

### <特に工夫した講座内容>

・受講生が自ら学び、自らの資質能力を向上させることができるように、日々の実践と関わらせることができるような課題を提示し、取り組むことができるように工夫した。

### <次年度以降工夫・検討したい講座内容>

#### ① ハイブリット型授業のデザインと教えないで学べる学修環境の整備

新しい社会の Global・Innovation に対応した継続性を必要とした生涯学習の実現や将来の“after コロナ”時代への対応も含め、対面授業を基本としつつ e-learning を組み合わせた講習で実施し、その教育の方法と技術を確立すると共に、従来の講義形式から脱却し、教えないで学べる学習環境の整備と講座の設計を行う。

#### ② キャリアステージに対応した幼稚園教諭に求められる資質能力の構造化

幼稚園教諭として不易とされる資質能力と新たな課題に対応できる力並びに組織的・協働的に諸問題を解決する力を中心にキャリアステージに対応した幼稚園教諭の資質能力を明確化し、講座の学修目標の分析と構造化を図り、資質能力とのカリキュラムマップを作成するとともに各講座のタキソノミーテーブルを作成する。

### ③ 幼児教育の新たなキャリアである幼児教育コーディネータの養成カリキュラムの開発

教員自身が時代や社会、環境の変化を的確につかみ取り、その時々状況に応じた適切な教育・保育の提供を行うためには、個々の教員が自ら課題を持って、主体的に研修に参加する研修体制の確立が必要である。その際、受講者のニーズに応じて柔軟に研修内容を組み合わせたり、ワークショップ型研修方法を取り入れたりして、受講者が主体的に学ぶ講座の場を考えていく必要がある。そこで、幼稚園教諭の資質向上を目指すキャリアステージにおける講座の在り方を研究し、幼児教育の新たなキャリアである幼児教育コーディネータの養成カリキュラムを開発・試行する。

#### ○実施団体にとってのメリット/デメリット

##### <メリット>

- ・本学の幼稚園教諭養成課程のカリキュラムに、現場の声を活かしたカリキュラムとして反映をすることができる。
- ・社会人の学びと学部学生との学びは異なる。社会人の学びの特性を実証することは重要である。

##### <デメリット>

- ・科目を担当する教員にとって、授業内容等の再考の場となり、講座担当者の力量形成の場にもなると同時に、科目の内容は、毎年見直しをしていく必要性もあり、負担増にもつながる。

#### ○時期・期間、講座数、価格設定、定員の変更等（もしあれば）、来年度の意向

- ・来年度は、幼稚園教諭2種免許状保有者が、自身の資質能力を向上させたいと思えるよう、免許状の上進のみにとどまらず、新たな付加価値を与えるような仕組みとする。
- ・受講形態として、集合しての対面での講座実施ではなく、受講生が任意に受講場所を選択し、日々の勤務と学びを両立できる講座実施体制を築く。（例えば、対面での授業も、オンラインを活用して実施する等）
- ・講座数は、2年間で教員の実務経験10年以上の教諭が、幼稚園教諭免許状2種から1種に上進できるよう科目を設定する。今年度1年目として実施したため、来年度は2年目として、新たな科目の設定とテキストの見直し、カリキュラムを全面的に改訂する。
- ・加えて、教員の実務経験12年以上の教諭が、1年間で受講できるようにも、開設科目を設定する
- ・経験12年目以上の上進の際には、講座をパッケージ化し、10単位で受講料を30,000円と安価に設定し、多くの教員がいつでも、どこでも、誰とでも一緒に受講できるようにする。

##### <幼児教育コーディネータの創設>

「地域・学校園における幼児教育の研修及び専門的指導」のための研修講座の計画立案実践能力、組織化、および地域課題解決への具体的対応力を身につけることにより、地域、学校園における保幼小連携などの幼児教育をコーディネートできる人材の育成や、その能力の向上を図ることを目的とする。

- ・履修証明制度を創設することにより、【**幼児教育コーディネータ養成コース**】を設定する。
- ・履修証明制度は、学校教育法第105条及び学校教育法施行規則第164条の規定に基づき、大学が教育や研究に加えてより積極的な社会貢献として、主として社会人向けに体系的な学習プログラムを開設し、その修了者に対して、法に基づく履修証明書を交付するもの。